論　文

希望―より遠く，高い未来への飛躍

佐　藤　俊　一※

この小論は，私たちが時間的存在であることを基本に据え，希望について探究するものである。希望は未来に向けられるものであるが，未来が不確実だということが，希望を難しいものに，同時に可能性を有しているものにしている。また，希望は未来をはらむ現在の洞察であること。絶望の中で無形象という本来の希望が生れることを論じていく。

私たちが時間であることを，過去，現在，未来と分節化，対象化された時間ではなく，一つの時間として提示する。さらに時間が現在において誕生することを論証していく。こうした根源的時間性を提示することで，先に示した希望の本性を明らかにすることができる。

キーワード：不確実性，無形象性，絶望，根源的時間性，生誕する時間

たくさんの戦争が続いた20世紀が終わり，私たちは新しい21世紀を迎えた。しかし，世紀は変わっても紛争が世界各地で次々と起こっている。それだけでなく，地震，大雨等の自然災害，新型コロナウィルスによるパンデミック等に遭遇している。直近では，ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。新しい世紀になって20年が過ぎたが，私たちは困難な状況に浸かっていることは明白である。そして，先の見えない状況が続くと「希望」という光を求める。

あたりまえに続くと思っていた日常は崩れ，非日常の世界が始まる。東日本大震災（2011.3.11）の後には，「自粛」という風潮が広まった。毎年行われている「卒業式，入学式」がなくなった。新型コロナウィルスの蔓延時には，緊急事態宣言（2020.4-5）が発出された。政府から「不要不急の外出を控える」ことの「要請」があり，できるだけ他者との接触を避けることを求められ，宣言の解除後も暗黙の要請は続いている。気がつくとマスクをすることも含めて，非日常であったことが日常と化している。以前の生活を取り戻すことを多くの人が望んでいるのだが，簡単には実現できないこともわかってくる。未来はやってくると無意識に思っていたことが，怪しくなる。

希望は手元にあるようで，遠くにある。希望をもって取り組むと，失望という落とし穴が待ち構えているなど，簡単には手に入らない。また，私たちが希望のなさを語るとき，希望を前提と

※　淑徳大学大学院総合福祉研究科兼任講師，NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば理事長

していることがわかる。どこからアプローチしたらいいか悩んでしまうのだが，先行研究にあたっていくと，その根底には希望は未来へ向かうという視点から，時間をどのように捉えるか，時間との関係の理解からのものが多いことに気づく。[1] 私たちは産まれた時から，時間とともに生きる「時間的存在である」である。メルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty,M.=1964:337）は「われわれにとって時間が意味をもつのは，われわれが『時間である』からでしかない」と強調する。人間は，現在，過去，そして未来があることによって存在している。私たちの主観に，これらの時間の動きが密接に関係している。例えば，大きな事故に合うと「時間が止まっている」と感じる。壊れた時計の針がその瞬間に象徴的に止まっているだけでなく，時間が先に進まずに自分が止まっている。まさしく「私たちは，時間なのだ」ということがわかろう。

希望をもつということは，未来へと開かれていることである。確実にやってくると思っていた未来の到来が揺らぐ中で，私たちは今「分かれ道（crossroads）」[2] にいる。外側から迫ってくる困難な状況に生き延びる道だけを選ぶのか，それとも不安の中で自分らしく生きることを選ぶのかを問われている。そのためには現在の生き方，同時に過去や未来をどのように受けとめているかという足元を確かめることである。希望という厄介なテーマに挑むために，「私たちは時間である」というメルロ＝ポンティのことばを基本において検討してみたい。先ずは，誰もが抱く希望に対する素朴な問いから始めてみよう。

1．希望への素朴な問い…多くの人が考える希望とは

先日，ある70代後半の女性と会話をしていた時のことだ。話の流れから，ふと希望についてどのように思うかと尋ねてみた。すると，「若い頃にはいろいろとやりたいことがあったが，今は具体的な目標が浮かばない」と話された。目標とする対象がないことで，考え出すと不安になるとのことだ。希望について考えることは滅多になく，遠くに行ってしまったということが伝わってきた。このように聴くと，歳を重ねることで希望は無くなってしまうかのように思ってしまう。ところが，面白いことに具体的なものがなくなる，邪心がなくなることで，本来の希望へ近づくチャンスは生まれる。

平凡な毎日を過ごすなかで，私たちは希望をもつということをどのように考えているだろうか。苦労することが続いていても，真面目にやっていれば，状況は変わっていき良いことが起こるだろう。努力すれば必ず報われる。今が最悪だがこれ以上悪くなることはなく，これからは良くなるだけと肯定的に捉えることもできる。このように未来の良い方向性を期待し，希望を楽観的に考える人たちがいる。ところが，実際は，未来は未確定であり，何を根拠にそう言えるのかと問われると，答えるのに窮してしまうだろう。しかし，多くの人は期待し，欲望を抱く。感情的に望むだけではなく，理性的に判断する必要がある。具体的なものだけでなく，かたちにならない

ものであり，摑みどころのないところに特徴がある。そのため，希望は感じるという人間のあり方の根底にかかわるものであると言うことができそうだ。

(1) 確実にあるものなのか

自ら進んで先に進もうとする人は，未来へ期待をしている。現在よりも明るい未来を想像し，希望をもって生きられると楽観的に考える。こうした希望に対する態度をイーグルトン（Eagleton, T=2022:3-8）は，「楽観主義」と呼び批判する。反対に，「真の希望が必要とされるのは，状況がのっぴきならないときである」（Eagleton, T=2022:8）と指摘する。時間とのかかわりから検討してみよう。希望は，未来を前提としているのだが，イーグルトンも指摘するように，現在をどのように生きているかで受けとめ方は異なる。困難な状況が続くと，未来は見えずに，遠く離れたところにある。また，現在は過去をどのように捉えているかによって異なってくる。過去を過ぎ去ったものとして，「確定している，変更できない，閉ざされたもの」と後ろに置いておけば，現在は目先のことだけに集中していればいい。しかし，過去を完全に現在から引き離すことは無理があり，私たちは過去を振り返って喜び，後悔する。そのため過去の受けとめ方によって，今度は未来が変わってくる。過去の体験を乗り越える気持ちが現れてくると，現在がどんなに厳しくても未来への志向が強くなり，未来が現れる。前方に不動なものとしてあるのではなく，自分の方へやって来ることを期待し，それを望むのである。しかし，簡単に引き寄せられないので，自分から近づいて行って手に入れようとする。このように現在を起点とし，過去とのつながりのなかで，私たちは未来を志向し，希望を求める。そのとき，希望はどのようなかたちで現れるのだろうか。

明るい未来を志向して行けるといいのだが，先にある未来を簡単に掴めないとわかると不安になる。先に示したように，時間をどのように捉えるかで変わっていく。そのため，いつでも明るく捉えられるかという疑問が湧いてくる。昨日は希望があるように思えたのに，今日になったら心配になるという具合に，不確実性がつきまとっている。ただ未来へ前進するという楽天的な発想では希望を実現することができないことがわかる。不確実性が希望の特徴なのだが，同時に定まっていないことで可能性が生まれる源になることを押さえておく必要がある。

(2) 理性的なもの，それとも感情的なもの…希望の独自性

希望は不確実なものであることを確認した。それゆえ冷静に，理性的な思考をすれば，実現を望むのは難しいことだと気づく。しかし，私たちは困難な状況から光を求める。そこには，理性的なものではなく，感情的な欲望がある。「辛い，苦しい，耐え難い状況がいつまで続くのか」という中から何が何でも抜け出したいのである。したがって，欲望は私たちを動かす大きな力になり，希望とも密接にかかわることは容易に想像できよう。

先に未来への期待という捉え方を示したが，欲望とはどのように関係し，またテーマである希望とはどのようにつながるのか。ここでは，ミンコフスキー（Minkowski,E.）の労作『生きられる時間』における「未来」の理解を参照しながら検討してみたい。同書で「時間に於ける方向の観念を本来的な仕方で含んでいる，躍動というこの現象は，われわれの生が本質的に未来へ方向づけられるようにする」（Minkowski,E.=1972:102）と指摘し，生きる方向性を提示している。また，続いて「躍動の過程では，波風が立つが余白があることで安心できる」（Minkowski,E.=1972:105）と補完もしている。

最初に検討されるのが，生ける存在の基盤となるものとして，あるものから別のものへ移行する「活動性」と，やって来る未来を待つという「期待」についてである。この両者の協力によって，私たちは世界における一般的な態度を決定するのだが，直接的にある未来へと位置づけられる。それに対して，背後に間接的にあるものとして，一つの対象を目指す「欲望」と具体的なものはなくても未来を開く「希望」を上げる。希望には活動性が含まれており，期待と同様に未来が私の方にやってくるのを見るのだが，これらのものより遠くの未来へ行くこと，さらに私たちは「背後に展びひろがる未来のために希望する」（同:129）ことになる。さらに「祈り」において「果てまで，間接的なものではなく絶対的なもの，そして完全的内面化に到達する」（同:136）と捉えている。

このようなミンコフスキーの理解は，希望が活動性や期待，欲望と区別されるだけでなく，基盤となることを示している。また，イーグルトンも（Eagleton, T=2022:98–100）「希望は，欲望と期待から成り立っている」ことを認めている。そのことから理性的な判断だけでなく，感情的なことが果たす役割を理解できる。しかし，ポイントは，それだけではなく希望の独自性である。希望は未来を信頼することで生まれる。愛することが見返りを求めないのと同様に，証明されていないことが必ず実現すると確信をもって飛び出す（躍動する）ことである。そのとき，合理的思考だけではなく，また，ただ感情に左右されるのではなく，強い「信念（faith）」（Fromm,E.=1970:33–34）が必要となる。ただし，注意しなければならないのは，良性の希望だけでなく，悪魔の希望もあるからだ。ロシアのプーチン大統領は，希望を抱いてウクライナ侵攻を始めた。

（3）具体的な目標があること，ないこと…絶望がもたらすもの

希望は，未来への私たちのさまざまな想いから成り立っていることがわかった。そのため，少し厄介な病気になっても治療をすれば回復できると医師から診断されれば，未来へ期待して待つことができる。自分の望むことが少し遠回しになっても実現可能だろうと考え，具体的な目標をもつことができる。

ガンと診断され，余命が数か月と死を予告された場合はどうだろうか。誰にでも起こることだと頭でわかっていても，苦悩することになる。残された時間をどう過ごすかだけではなく，これ

までの生きざまを含めて，自分自身の生と改めて向き合う機会になる。自分が苦悩していることを医師や看護師と話せるといいのだが，話題になることは直近の検査や治療に関することばかりで，不安を抱いている私に関心を向けてくれない。本当はパートナーとも話したいのだが，余計に心配させることになると思い話せない。

運命的に避けられないこと，限界に突きあたる時，私たちは生きる目標を無くし，絶望する。しかし，治らないと本当にすべてが終わりになるのか。生きる苦しみが大きければ大きいほど，不思議なことにスピリチュアルなものが生まれる可能性が高くなる。そして「スピリチュアルなものに目覚めた瞬間に希望は生まれる。」（佐藤 2020:19）と言うことができよう。希望は全く考えられないときに，突然に現れるのだが，それが本来的な希望であり，マルセル（Marcel,G.=1968:60）は「無限なる存在に対して行う応答として現れる絶対的な希望」と呼ぶ。こうしたことが示唆しているのは，「絶望への誘惑が入り込んでくるところにしか希望は存在しえない」（同:46）や「絶望は反語的に希望の指標となる」（Eagleton, T=2022:216）等と絶望の中で生まれる希望こそ，本来の希望だということである。

これまで希望に対する素朴な疑問をとりあげ，それを洗練するために必要となる検証の入り口を示した。以下の章において，それぞれの問いを掘り下げることで，希望の本質を明らかにすることと，実際に希望が生まれるために私たちが問われることを明らかにしていきたい。

2．不確実であることの可能性…開かれた世界へ飛び出る

時間を管理することが現代人の課題であるが，多くの人は時間に管理されているのが現実であることを知っている。毎日の生活を見てもわかることだが，繰返しの生活のなかで何時までに何をしたらよいのかが身体に染みこんでいる。反対に新しいことを計画すると，未来の時間をどのように計画するかを慎重に考え出す。決められた日常ではなく，自分から時間を管理しようとすると，ストレスを感じ始める。裏返してみれば，私たちが時間に管理されて生きているという身についた自然的態度がわかる。

対人にかかわる支援者は，支援計画を立ててクライエントの課題に取り組むという目標達成型の行動を行う。呼び名は，個別援助計画，ケアプラン，看護過程等ちがうが，アセスメントを行い，支援目標を立て，モニタリングをしながら行うという基本的な進め方は，共通している。業務を効率よくするためには未来の時間を管理すること，ある限られた期間内に目標を達成することが求められる。ところが多くの支援者が体験しているように，実際には計画通りにはいかないことが多い。そのためモニタリングを行い，修正を行っていくということで対処するのだが，当初は予想できなかったことがケースを動かす力になる。

このように先のこと，未来を計画的に動かそうとして思い通りに行かないことを私たちは体験

している。その基には，未来のことを定めようとしても，限界があること，それだけでなく未来の時間をどのように捉えたらいいのかという根本的な問いかけが必要なことに気づく。時間が未来へと開かれていることが希望の源泉となるのだが，同時に開かれているがゆえに思い通りには行かないというのが避けられない課題である。

以下においては事例を使いながら検証をしていくが，それらは，私が行っているスーパービジョンにおいて参加メンバーから提出された事例を基に，典型的と考えられる内容のものから作成したものである。

(1) アセスメントに悩むＡさん…クライエントとして対象化する態度

地域包括支援センターで社会福祉士として勤務するＡさんは，経験年数も少なく，アセスメントがうまくできずに悩んでいた。できるだけ正確に行いたいのだが，時間がかかってしまい，また適切なものを作成できているか自信がない。自分の中に合理的根拠がもてないことが不安だった。今回の事例では，緊急の判断が必要ということで情報の収集を行うのだが，課題は山積みで，クライエントを取り巻く環境も刻々と変化していき困難さを感じていた。

クライエント（Ｏさん）は脳血管障害の後遺症でうつ状態が続いており，慢性肝炎等もある。現在，アパートで一人暮らしなのだが，事前の関係者からの情報から，ほぼ寝たきりで，食事も満足に食べられない状態だということだった。簡単にはいかないだろうと，Ａさんは当初から予測していた。

Ｏさんは，アパートで母と弟との３人暮らしをしていたが，仕事で人間関係がうまくいかず，うつ状態が続いているときに脳血管障害の発作を起こした。その後母親が他界し，弟との二人暮らしになる。弟は，生前に母親から「兄は父親が亡くなってから家族のために頑張ってきたのだから責めないで，守って欲しい」と言われる。弟は，母親から言われたようにＯさんの生活を支えるのだが，自分ががんの末期状態との診断を受け，入院してしまう。そのため，Ｏさんが一人で，アパートで暮らすことになる。

ここから社会福祉士Ａさんにとって驚きの展開となる。民生委員や関係者からは，コミュニケーションは難しく，おかゆしか食べられず，外へ出られないと聞いていた。そうした情報から，自分では何もできない人と対象化していた。ところが，ある日弟のことを心配して一人で病院を訪れるのである。また，生活費をどのようにしているか心配していたが，自分でATMからお金をおろすことができていた。Ｏさんの生きる力を発見し，それまでのアセスメントが揺らいでしまう。しかし，改めてＯさんのことを理解し，アセスメントをする機会となった。

(2) 未来を計画することの限界…予期できないことからの発見

このように急激にクライエントの生活状況が変わっていく中で，Ａさんは元々アセスメントが

うまくいかなくて悩んでいたのだが，自身の課題と直面することになった。事前の評価から支援の計画を立て，すること（do）を考えることで完結させると，未来を閉じることになる。ちょうど建物の平面図を作り，そこに時間的段階を加えるという作業をしているという具合である。完璧なプランを作れば，それを維持し実行したいと，より世界の閉鎖性は高まる。しかし，この事例では状況が刻々と変わっていく。したがって，未来は合理的にすべて計画できるかという根本的な課題に直面する。

作りあげた計画に支配されるのではなく，クライエントや状況を理解しながら進めることが必要になる。現在を相手とともにいる・生きる（being）ことをすれば，相手の動きを見て感じることができる。枠組みに頼らないで理解することは，相手を単に援助の対象として客体化せず，主体と客体とを区分しない状態で始めることになる。そうすることで，今までの固定化した見方から新たな相手の全体が見えてくる。

Ａさんの驚きの発見は，離れたところにいる支援者としての目線ではなく，主客分離以前の状態で感じ取ったことである。事前の情報による見えるものが邪魔していたのだが，今まで見えなかったＯさんの生きる力が見えるようになったのである。閉ざされた世界から開かれた世界へ飛び出たのである。このように，「見えないものは，実は見えるものの中にある」（佐藤 2020:103–106）のだが，予期せぬ相手の行動が助けてくれることで見えるようになる。開かれた世界において，それは偶然に起こったことであるが，一見すると計画を妨げるようなことが，新たな展開を可能とする。このように計画を立て，それに忠実に従っていると見えないものが見えるようになることで，予め計画し得なかったことがわかるのであり，それに対応できる実践力が支援者には求められる。

計画を立てることの限界とは，「人間にとって自由に処理しうる未来の限界も与えられている」（Bollnow,1975:109）ことを意味している。したがってアセスメントはぶれることになり，修正を要する。アセスメントが動的診断とも呼ばれるのもわかろう。それは，これまで指摘したように，支援者がクライエントを見ているのか，計画したことだけを見ているかのちがいによって起こる。クライエントとともにいて相手を見ていると，予期できないことを発見できる。それは未来が不確実なものであることの表れであるが，自分の方から志向するだけではなく，外側から様々なかたちで突然にやってくる。それが見えるようになり，そのまま受け取ることができれば新たな展開が生まれる。私たちは未来に開かれているのだが，未来を計画することには限界があることがわかる。他方で，未来が不確実であるがゆえに，私たちは可能性に開かれている。支援者がその可能性を見えるようになり，手繰り寄せると，クライエントに希望の光が生まれる。

3．希望は未来をはらむ現在の洞察…生誕する時間

未来は，それだけを切り離して考えることはできない。当然のことだが，新たなことを始めようと未来を見ると，過去の取り組みが思い出される。そして，未来の決定に大きな影響を及ぼす。その際に，時間が単純に過去から現在へ，そして未来と流れるものではないこと。また，過去は反省，現在は現実，未来は計画だけではないといった様々な時間の諸相が表れる。時間を区別して優劣をつけること，体験する順序が問題なのではない。私たちは，時間を区分して考える以前に時間を生きている。反対に，「意識の内在的対象としての時間は水平化された時間であり，言い換えれば時間ではないのである」（Merleau-Ponty,M=1967:312）こと，また時間が構成化されるものでもないことがわかる。そこでは，メルロ＝ポンティが指摘するように「過去と現在と未来が同じ意味で存在している」（同:312）のである。同じ意味で存在するから，私たちは時間を様々に生きることができる。

この生きられる時間を基本に据えると，先に希望の独自性として信念が基盤になることを指摘したが，次の信念に関するフロムの一文（Fromm,E.=1970:33）が，希望にも当てはまることがわかる。「信念は希望と同じように未来の予言ではなく，未来をはらむ現在の洞察」である。併せて，過去をどのように受けとめるかということにもかかっていることをＹさんの事例から見ていきたい。

（1）自分を使い分けてきたＹさん…いつも不全感がある

Ｙさんは，普段は人事の部長として会社で重責を果たしていた。ある時から週末に相談のボランティア活動やそのための対人援助の研修を受講し始める。学んでいくことで問題解決のためではなく，相手のことをわかるために聴くことへの関心が深まっていった。ところが研修の中で，休日とウィークデイで自分の態度を使い分けていることに気づき，愕然とする。しかし，分けないとやっていられないこともわかった。仕事でのＹさんは，相手のことを思って行動しているのだが，その前提には会社のため，生産性の向上という目標があり，本当に部下や社員を大切にしようとしているのかと悩むようにもなった。

そうしたなかで，ボランティア活動の相談面接において，長期間に亘って面接を続けていた相手との間で衝撃的な出来事が起こった。相手は50代の男性で精神障害によって仕事も，人との付き合いもうまくできずに継続的に相談にのっていた。また，クライエントは，これまで特殊な仕事をしてきたので，Ｙさんはその話を聴くことは面白いし，抵抗もなかった。ところが，研修で「相手を大切にする」「今・ここでを生きる」ということを学ぶことで，自分がこのままずっと話を聴くことが本人にとってよいことなのか，と疑問をもつようになった。

当然のことだが60歳近くになって仕事もせず，預貯金もわずかしかないということで心配だっ

た。これまで触れずにいたのだが，ある時に心配している気持ちを伝えずにはいられなくなった。思い切って，「私はただあなたの話を聴いていればいいのですか」と投げかけてみた。クライエント（Hさん）は，「あなたは私の話を聴いていればいいのです，何でそんなことをいうのか」と怒りだして，とてもきまずい雰囲気になった。Yさんは思い切って言ったことで怒られるのだが，それでもよかったと感じた。今・ここでHさんと向き合うことができ，生き生きとする自分を感じたからだ。中途半端な自分だったことをYさんは発見できたのである。

場や相手に応じて自分を使い分けるということ，そのことは社会生活をするためのヨコの関係，つながり的発想で生きていることを表している。それが「今」という瞬間に動けることで，過去や未来の関係が動き出し，つながりを超えてタテへ飛躍し，躍動することができる。つながりに縛られていた自分へ自由になることだったとも言える。

(2) 今という瞬間にどのように向き合うか…現在の時間の誕生

会社のため，効率の良い人事管理を第一にしながらも，Yさんは相手を大切にしたかかわりをしてきたつもりだったが，相談活動の学びで揺らいだ。また，相談面接では学んだことを活かして相手の独自性を尊重した支援をしたいと思っていたが，できていないことに気づく。自分でも不全な状態が続いていたのだが，打開策が見いだせずに止まっていた。

こうした過去に対してどんな態度をとるかが問われる。薄々気づいていても，そのままにしておくことは，過去を固定化されたもの，変更できないものとする態度である。そのため「こわばった過去」（Bollnow,O.=1975:90），同じことを繰り返すという「保存された過去」（同:92）が，生の躍動を妨げることになり，新たな時間が生まれてこないことになる。反対に，過去の私のありますべてを引き受けることができれば，「過去と私との一致，適合し，支えとなる」（同:87-90）のである。そのことによって，未来への向き合い方が変わる。

面接では，相手のことを大切にしているつもりになり，聴けているフリをしている。それは話の内容に興味があるだけであり，相手への関心が無いことの表れである。Yさんが感じていることをそのまま伝えたことで，怒りとともにHさんが迫ってきて，向き合わざるを得なくなった。ハッとし，今は永遠に続くように苦しい時間となったが，逃げずに，踏みとどまることができた。それまでの同じことを繰り返しているときには，同じように始まって終わるという繰返しのテンポで面接は進んでいた。時間の中に自己を埋没させ，予測できる時間であった。ところが，今回の面接では自ら動き，テンポは変わるのだが，思わぬ展開となる。怒りに応えようとすると，ことばが出なくなり，間が生じた。「今という瞬間は永遠になるのだが，時間軸では測れず，未来や過去をもたない。」（Kierkegaard,S.:288）のである。そのため今という瞬間を生きることは不安であるが，その不安とともに生きることで私たちは成長する。そして，未来や過去との関係を変える契機となる。

苦しい時間であったが，決断するために必要なことだった。自分の気持ちが動いて相手を大切にしたいと，相手と自分に向き合うことで，新たに「現在の時間が生誕し，出現し始めた」（Merleau-Ponty,M.=1964:313）のである。それは現在を洞察したことになるのだが，単に過去に対する態度だけではなく，未来をはらんだものであり，生誕する時間のなかで，Ｙさんは自分が新たに生まれるという体験をしているのである。

生誕の状態にある時間を生きることで，私たちは繰返しの日常から脱却できる。現在の洞察を行うことは，すでに見てきたように過去への態度を明らかにし，同時に未来をはらむものとなる。そのプロセスにおいて，まやかしの日常による希望を捨てることができる。苦悩するだけと覚悟したのだが，時間の生成の中で真の希望は生まれる。計画し，予測することはできず，厄介であり一筋縄でいかないのが時間との関係であり，そこから生まれるのが希望である。Ｙさんは，「時間は私があろうとしているものから私を引き離しもするが，それと同時に，距離を置いて私を捉えたり，私を私として実現したりする手段をも私にあたえてくれる」（Merleau-Ponty,M.=1964:332）ことを体験したのである。

４．かたちのないものに身を委ねる…希望の無形象性

安全な生き方を志向する人は，失敗や挫折がないようにし，自分を周りから不要な存在とみなされないように気を配る。ところが，生きている限り生活の危機は避けて通れないことを誰もが知っている。自分自身のことだけでなく，家族，友人等にも突然にもたらされる。むしろ，失敗や挫折は生きている証であるとも言えよう。

突然に外部から襲ってくるものを事前に予測しようとしても難しい。目に見える成功や成果を求める人は，不測の事態が生じた時，それらを失ったショックに打ち負かされてしまい，生きる意味を見いだせなくなるかもしれない。今まで自分が価値を置いていたものを失ってしまうからである。ところが自分が役に立たない存在だとわかったとき，新たな生き方ができる人がいる。どん底において支えとなるものを見出すのだが，それは目に見えるものではない。したがって，それを誰の目にも見えるようにするのは難しい。

欲望や願望のようにある目標を目指すのではなく，かたちにはならないのものによって生きる力が湧いてくる。それは失ったものに執着するのではなく，断念することで生まれる。不思議なことに諸々のものを手放し，何もなくなることでわかる。無用者になってみて，初めて見えてくるのである。このように，「希望の根底には，私たちを絶望に誘う状況の意識がある（病気，堕落，等々）。」（Marcel,G.=1971:73）ことがわかる。絶望は希望の真逆のことと思われるかもしれないが，実は真の希望が生まれる体験でもある。ただし，その希望とはかたちにはならないものであり，そこに希望の本質が見えることになる。ある学生の挫折の体験[3)]から検討していきたい。

(1) 先に進めない苦しみ…生きているからできること

高校卒業の間近まで順調に歩んでいたＦさんは，卒業後の進路をどうしたらいいかわからなくなり，３年間立ち止まってしまうことになる。その間，基本的には自分の部屋に閉じこもり，人との付き合いは無かった。やがてこのままではダメだと思い，とりあえず大学に進学する。大学へ入学しても，自身の状況は変わらない。出られるときに授業に出席するが，４年間では卒業できずに最後の年の８年目を迎える。残すは卒業論文だけとなり，私のゼミに偶然に応募してくれ，初めて会うことになった。

このゼミの学びが彼にとって鬼門だった。自身がレポーターになってみんなの前で発表し，ディスカッションをする。また，１年後に論文を完成させるために，テーマを選んだ理由から，進捗状況を発表してメンバーの学生や教員からのフィードバックを受けることになるからである。これまでＦさんは自分のペースでやってきたが，ゼミでは他の学生や教員と一緒に行わなければならず，避けてきたことと直面せざるを得なくなった。

ラストチャンスのＦさんが，４月から本当に毎回ゼミに来てくれるか。卒論の中間発表の準備ができるか，個別に相談に来てくれるか，ゼミの場で発表ができるか等心配なことはたくさんあったが，何とかやってくれた。ペースはゆっくりだったが，夏には二泊三日の合宿にも参加してくれ，本人からやろうとしている気持ちが感じられたので，私は少しだけサポートして見守っていた。

年末には，分量的には基準のギリギリだったが，彼は自分の体験を基にした卒業論文を完成させることができた。そうした取り組みの中で，ボソボソと話すペースは変わらないが，明るさが出てきて，目が輝いてくるのがわかった。私には彼の希望が見え始めた。

ここに至るまでに，一緒に学んだゼミ生が，Ｆさんに無理強いをせずに彼のペースを尊重してつき合ってくれたことが大きい。人にかかわることに警戒心を抱いていたＦさんが自分を出せるようになった。こうした変容は，Ｆさんだけでなく，ゼミ生，私にとって驚きの展開だったが，お互いに希望を感じるようになった体験だった。そして，本人が一番驚くのだが，正規雇用の就職もできた。

(2) どん底での偶然から生まれる希望…かたちがなく，ことばでは表せない

Ｆさんは，大学に入学する前に挫折した。彼の挫折の傷は深かった。そして大学では８年かけて悩んだ末に卒業を決意し，卒業論文のゼミを選んだ。それが私のゼミだったことは，また，Ｆさんを苦しめる機会になった。学生の一人ひとりの自主性を尊重し，参加メンバーがみんなで話し合って行うというゼミだったからである。一見すると，どん底にいるＦさんには厳しい条件に見えながらも，人から傷口に薬を塗ってもらうのではなく，ゆっくりだが自分から行うことで先が見えてきたのである。不思議なことだが，挫折の傷が深いほど確かな希望が生まれるように感

じる。

これまでも示したきたように，私たちは未来に開かれているのだが，すべてを予測し，計画することはできない。Ｆさんも，まさか高校生活を終えるときに，こんな運命が待ち構えているとは思いもしなかっただろう。さらにどん底における大学８年目の後がない状況から自分を取り戻すのである。たくさんの障壁があるのだがそれに抵抗することによって可能となり，はたまた計画や予定をしなかった行動ができたのである。どん底へ落ちるのも偶然だが，そこから這い上がるのも，また偶然が作用している。未来の開放性は，私たちの常識を超えることをもたらすのである。

ここで着目したいのは，現実にある障壁とどのように向き合うかである。Ｆさんにとって思いもよらぬ問題が突然に起こった。それに抵抗するとは，異論と対話することになる。対話するとは，彼が一人で考えことを計画，実行するのではなく，外部からやって来た予期せぬものと，さらにゼミのメンバーと話し合うことだった。その際に，ボルノーが指摘するように，「生きた対話は，異論が予見可能ではない」（Bollnow,O.=1975:179）ことをまさに体験する。また，２つの根元語（我と汝，我とそれ）から対話を基礎づけたブーバーが「真の対話を人間は前もって起草できない」（Buber,M.=1968:114-115）と示しているように，偶然的なことである。やって来るものだけでなく，彼の応答も偶然である。この予測できないということが，可能性を生み出したのである。

では，卒論を完成させ，就職できたことが希望だったのだろうか。それらは結果として大切なことである。しかし，私たちが感じた希望そのものではない。一つひとつできることをしながら，避けられない運命へどんな態度をとるのかを問われているのだが，未来に身を開き，最後に希望へ身を委ねことができる。そのとき，希望はかたちあるものではなく，「真の希望は無形象である」（Bollnow,O.=1975:185）ため，具体的な対象としては見えない。ことばでは表せないのだが，Ｆさんだけでなく，かかわる私たちにも感じられたのである。フロムが指摘するように「希望は生命と成長の副産物」（Fromm,E.=1970:32）なのであり，私たちは，新しい生命の芽生えを感じ取ったのである。[4)]

５．生きづらい時代に生まれる希望

ここまで希望が簡単に手に入るものではなく，また意のままにもち続けることができないことを見てきた。反対に，困難な状況に陥ったときに，私たちが孤独，不安といった人間的体験をどのように受けとめるかにかかっている。不安の中で，時間は止まったり，ものすごいスピードで動いたりする。時間に翻弄されるのだが，「眼を見開いて限界状況に踏み入ることによって，われわれは，われわれ自身となる」（Jaspers,K=1964:233）ことができる。そこでの時間が，日常で見

失っている本来的な時間の体験をもたらす。時間は未来へと動き続けるのだが，単に時計時間が先に進むのではなく，私たちにとって時間の生誕であり，出現しつつある時間となる可能性をはらんでいるのである。

生きづらい時代と冒頭に示したのは，紛争や自然災害が続いているということだけでなく，そのことがもたらすことにどのように向き合うかである。起こった現象によって，その当事者は生きるのが難しくなり，辛い厳しい現実と向き合うことになる。他方で，現地から離れて遠くにいる人にとって，生きづらさを実感しているかと問うと，値上げやモノ不足で生活に影響があることでの理解はあるだろう。しかし，目先の生活に追われて，根本的な問題を見ようとしないことが多い。なぜなら，見ない方が楽だからである。わざわざ自ら苦しむことはしない。そのため身近に起こってみないとわからないことであり，そのときに自分が問題とどのように向き合うかが問われる。つまり，私たちの本性がハッキリするのである。困難を感じて絶望し，終わりを迎えようとする時，ただ流されてそのまま過ごすのか，新たな生に目覚めるかの分かれ目である。不思議なことだが，困難な時間を私たちがどのように生きるかによって，希望は生まれる。最後にこの点を確認していきたい。

(1) 時間が私たちに住みついている

希望を探求するのにあたって，時間をベースにして検討してきた。そのプロセスで，私たちが時間について主観的に自明としていることを問いかけてきた。ここでは，さらに「時間性が主観性を照らし出す」(Merleau-Ponty,M.=1964:329) ということを試みる。

これまで事例を通して検討したように，時計時間によってだけ生きているという理解は，時間の中に私たちがあること，支配されていることを示している。自分が計画して進めるときは，時間を思惟の対象としている。どちらも偏った見方であることを検証してきた。「知の対象とするのではなく，常に総合が必要となる」(同:313) のである。というのは，生きるということは，すでに時間との関係を生きているからであり，時間との関係を二次的に捉えるのではなく，根源的な関係を明らかにする必要があるからだ。メルロ＝ポンティは「時間が私たちに住みついている」(同:332–333) という絶妙な表現をしている。

この点を具体的に考えてみよう。生活をするなかで，私たちは，今何時であるか，どの季節であるかという具合に時間を分節化して捉える。ところが，現在において意識的に捉える以前には，時間は分節化されない状態で一つになっている。同様なことは過去や未来との関係でも言える。ある過去の出来事を想い出すときに過去は対象としてある。未来に思いを巡らすときも同様である。しかし，意識的に取り上げないとき，やはり時間は一つである。さらにメルロ＝ポンティは，私たちが時間であることを「時熟単位 (tempora)」(同320–322) ということばによって記述している。時熟とは，個々が現在感じる成熟した時間である。「過去は過ぎ去ってしまっているわけで

はないし，未来は未だ来ないでいるわけではない」（同:321）のである。一般的な過去から現在，そして未来へと流れる構図は，時間を予め対象として捉え結びつけることで成り立っていることがわかる。反対に，私たちはその都度に体験する時熟単位を外側から結び合わせた総合を行うは必要ない。現在の私が過去や未来に自由に移行することできるのは，基礎となる一つの時間において「時間の総合は移行の総合，つまりは自己を展開する生の運動」（同:325）だからである。

時間が私たちに住みつくとは，私たちが時間に巻き込まれていることで，それを見ることができないことを示している。私たちが現在において違う現在へと移行しようとする時，「時間は〈自己による自己の触発〉」（同:329）なのである。移行することで刺激を受けて行動が始まるのだが，それは爆発的なものである。同じ自己が触発し，されるのだが，このような動きが主観性であり，現実の流れとしての時間ではなく，「自己を知る時間である」（同:329）ことがわかる。時間を理解することは，私たちが自分の主観を，すなわち私たちを理解することになる。冒頭に示したように「私たちは時間なのである」ということがハッキリする。そして，希望は，この一つの時間から生まれるため，「不確実性」「無形象性」という特性を有している。さらに，現在において時系列の過去や未来ではなく，同じ意味で過去や未来があるから自己が触発し，開かれた未来へと飛躍することが可能になるのである。このように，希望は「根源的時間性」（同:323）の解明からその本性を明らかにできる。

（2）希望が生まれるとき…避けられない運命に対する態度

私たちと時間との関係が，希望を探求する「なぞ（mysteries）」の旅へと案内してくれた。私たちは希望を求めて，どうしたら希望が生まれるかを考える。ここまで検討して明らかになったのは，望むようにはできないということである。また，希望には，フロムが指摘するように「逆説性」がある。そのため「希望は受動的に待つことでもなく，起こりえない状況を無理に起こそうとする非現実的な態度でもない。希望はうずくまった虎のようなもので，跳びかかるべ瞬間がきた時に初めて跳びかかるのだ」（Fromm,E.=1970:27）と面白い表現をしているが，的を射たものである。

先に自己の触発，爆発的なものと表現した。飛躍する瞬間を，焦らず，遅れることなく，私を忘れて一切の執着を捨て去って「今」を生きること。生まれつつある時間の歩みの中に自己を入り込ませるのである。考えるのではなく，新しいいのちの誕生を本当に感じているか，という存在の状態が問われている。ことばにすると，このようになるのだが実践は難しい。未来は不確実であり，予見し得ないことが起こるからである。その瞬間に信念があるかがハッキリし，これまで示したように「未来をはらむ現在の洞察」を行うのである。そのとき，私たちは高く，遠くに飛躍することができる。そして，生き生きとなり，かたちにはならないが希望が生まれる。

それは，どんな時なのだろうか。最もハッキリするのは，自身や親しい人の死という別れであ

ろう。病気のために治療を受けることである程度は予期できる場合もあるが，事故や災害などによって突然に起こることもある。その際に，科学的に対処すべきことは徹底的に行い，計画的な対応が可能なことは行ってみる。次にそれらが役に立たないとわかったとき，この避けられない運命に対してどのような態度をとるかである。限られた時間の中で，今という一瞬が一度きりのことだと感じることができると，先に示したように自分の生を大切にしようと飛躍できる。飛躍するには，自分を守るためにしがみついているものを手放し，どん底から遠く，高く飛躍して大いなるものに全身を委ねることである。絶望の中で，またどん底において目覚めるのが，永遠なるものであり，開かれた未来に希望が生まれるときである。すべてのことは過ぎ去り，終わりを迎えるのは確実なことであるが，希望はその無常性をそのまま引き受けるという態度の表れなのである。

※この論文は，これまでの「希望」についての研究を中間報告として日本ミュージック・ケア協会全国セミナー（2022.8.1）において講演したものをベースとして，それ以降に研究を続け，深化させることによって作成したものである。

【注】

1）希望が未来にかかわるものであるため，私たちが時間をどのように生きるかに関係するのは当然であることがわかろう。引用・参考文献にあげたBollnow,O,Marcel,G. Fromm,E.,Eagleton,T.だけでなく，Bloch,E.（1959）The Principle of hopeにおいても時間とのかかわりが主要な論点となっている。

2）この視点は，フロム（Fromm,E.）の『希望の革命』で示されているものである。1968年のアメリカ合衆国の現状から，一つの道は人間が機械の歯車になる社会，もう一つが人間主義と希望の復活，技術を人間の幸福に奉仕せしめる社会としている。現在は，時代状況は異なるが，分かれ道とは，希望もなくただ合理的と思われる権威に従って生きるのか，それとも目覚めて自律した生き方をできるのかが，筆者の基本的な問いである。

3）この事例については，佐藤俊一（2008）『ケアの原点―愛する・信頼することへの挑戦』p.186-191 学文社からのものであるが，字数の関係で要約している。

4）同様の指摘は，マルセル（Marcel,G.）にもみられる。「欲するということは，つねに『何ものかを欲する』ことであることに対して，希望するということは，本質的に言って『何かを希望する』ことではない。…希望とは，言ってみれば，それによってわれわれの精神がつくりだされる素材のごときものである。」Marcel,G.（1944）Le mystère de l’être,Aubier-Montaigne,Paris（=1977 :378松浪信三郎，掛下栄一郎訳『存在の神秘』春秋社）

【参考・引用文献】

Bergson,H. 1889, Essai sur les données immédiates de la conscience, Press Universitaires De France（=1965 平井啓之訳『ベルクソン全集第一巻 時間と自由』白水社

Bollnow, O. 1972, Das Verhältnis zur Ein Beitrag zur pädagogischen Anthropologie, Quelle & Meyer（=1975 森田孝訳『時へのかかわり』川島書店

Buber, M. 1954, Die Sghriften Über Dialogische Prinzip Ⅱ.,Insel-Verlag（=1698 佐藤吉昭・佐藤令子訳『対話的原理Ⅱ』みすず書房）

Eagleton, T. 2015, Hope without Optimism,Yale University Press（=202 大橋洋一訳『希望とは何か―オプティミズムぬきで語る』岩波書店

Fromm, E. 1968, The Revolution of Hope ,Harper &Row（=1970 作田啓一・佐野哲郎訳『希望の革命』紀伊國屋書店

Jaspers,K. 1932, Philosophie Ⅱ —Existenzerhellung-, Springer（=1964, 草薙正夫, 信太正三訳『実存開明［哲学Ⅱ］』創文社）

Kierkegaard,S. 1844, Begrebet Angest, København（=1966, 田淵義三郎訳, 『不安の概念』中央公論社.）

Marcel,G. 1944, Homo Viator,Aubier-Montaigne,Paris（=1968 山崎庸一郎他訳　マルセル著作集4.『旅する人間』春秋社）

――― 1935, Être et avoir/ Présence et immortalité,Aubier-Montaigne,Paris（=1971 信太正三代表訳　マルセル著作集2.『存在と所有・現存と不滅』春秋社）

Pattison,E. 2002, Bone Mountain St.Martin's Press（=2004 三川基好訳『霊峰の血』早川書房

Merleau-Ponty,M. 1964, La Phénomnéologie de la Perception, Gaillmard（=1974 竹内芳郎・木田元・宮本忠雄共訳『知覚の現象学2』みすず書房）

Minkowski,E. 1933,1968, Le temps vécu,Delachaux et Niestlé（=1972 中江育成・清水誠訳『生きられる時間Ⅰ』みすず書房

佐藤俊一 2023「権威と良心–制度化されない社会から生まれる集団的責任」特集論文:現象学的なキリスト教社会福祉研究の試み　キリスト教社会福祉研究55号　日本キリスト教社会福祉学会

――― 2020『スピリチュアリティを目覚めさせる―均質化する社会を現象学から問う』川島書店

――― 2008『ケアの原点―愛する・信頼することへの挑戦』学文社

谷口隆之助1962『疎外からの自由－現代に生きる知恵』誠信書房

Hope: A Leap to the Far, Higher Future

Shunichi SATO

This essay explores the topic of hope from the perspective of us as temporal beings. Hope is directed toward the future, but its uncertainty makes this both difficult and possible. In addition, hope is an insight into the present that contains the future. I will argue that the original hope as an intangibles is born in despair. The essays shows that we are in time as a single time, not a past, present, future, articulated or objectified time. Furthermore, I demonstrate that time is born in the present. By presenting such a fundamental temporality, we can reveal the true nature of the previously mentioned hope.

Keywords: Uncertainty, Intangible, Despair, Fundamental Temporality, Time of Birth